

## 映画評

### 外国映画

#### 『Wonder ワンダー 君は太陽』

村上 暁 スタッフ

2017年 アメリカ 113分

監督 スティーブン・チョボスキー

原作 R・J・パラシオ

出演 ジュリア・ロバーツ

オーウェン・ウィルソン

いわゆる『見た目問題』を抱える10歳のオギー（ジェイコブ・トレンブレイ）が主人公。遺伝子疾患の影響で、人とは異なる顔のオギーが、初めて学校へ行くところから物語はスタートする。

いじめられることを心配する父（オーウェン・ウィルソン）の反対を押し切って、母（ジュリア・ロバーツ）がオギーの入学を決めた。新学期の朝、父、母、高校生の姉ヴィア（イザベラ・ヴィドヴィッチ）とともに、オギーは学校へ登校する。校門の前で、顔を隠すヘルメットを取り、生徒たちの好奇のまなざしに耐えながら、オギーは校舎の中へ。心配そうに見送る二人。自分の足で歩く小さな子の背中に向かって、心の中で「がんばれ」と言うことしかで

きない切なさ。子を持つ親なら誰でも経験する不安。ジュリア・ロバーツの表情が共感を呼ぶ。

映画の前半なのに、早くもクライマックス並みのドキドキシーン。オギーは大丈夫なのか、と親視線で心配してしまふ。

父が心配したとおり、いじめられたり仲間はずれにされたりするオギー。その夜、「なぜ僕は醜いの」と泣きながら訴えるオギーに、母は「顔はその人の過去を示している。（病氣と闘ってきた）あなたの顔は絶対に醜くない」と答える。明日からも学校へ行くことを決意するオギー。

こんな具合に、映画はオギーを中心に進むと思いきや、場面が展開し、「ヴィア」（オギーの姉）が語り手となる章が始まる。

このあとも、オギーのクラスメイト「ジャック」、ヴィアの親友「ミランダ」と、語り手が変わりつつ物語が進む。主人公以外が語り手となる章が挿入されることに驚いたが、映画を見終わったときには、この手法が素晴らしい効果をもたらしていることに気付く。

ヴィアは、弟が生まれてからは、両親の関心をすべて奪われていると寂しく感じている。ジャックは、家が貧しく奨学金をもらっているのに、優等生でいなければならない。ミランダは、親が離婚して家にいるのがつらい。みんなそれぞれが問題を抱えているが、学校に通い始めたオギーと接することで、子供たちは変化していく。

ハロウィン、ヴィアの演劇、サマーキャンプ、修了式等、様々な出来事が起こる。最初はオギーの見た目にとらわれていた子供たちも、オギーの内面を知るうちに、彼を好きになっていく。「外見を変えられなくても、見る目を変えることはできる」ことを会得してゆく子供たちの姿がとてもまぶしい。

妻に遠慮しながら息子を見守るお父さんも素晴らしい。完全に尻に敷かれている場面がたくさん出てきて笑えるが、オギーとの男と男の会話にはジーンとする。ヘルメットを隠した理由をオギーに問い詰められて、「お前の顔が好きだ。ずっと見ていたいんだ」と答える。この映画は、印象に残るセリフが多い。母や校長先生の、愛情こもった台詞も素敵。

ラストの修了式は、ほぼすべてのキャストが登場して、感動の場面。重い問題を扱いながらも、最初から最後まで、明るく爽やかな映画だった。

現実の世界では、この映画のようにうまくいかないだろう。それでも、映画という作り物の世界で、「こんな風に解決する世界は素晴らしい」と思わせてくれる作品を観ることができたことに感謝したい。

今年観た中で、ナンバーワンの映画でした。



## 『タクシー運転手 約束は海を超えて』 中村藤生 スタッフ

2017年 韓国

監督 チャン・フン

出演 ソン・ガンホ、トーマス・クレッチマン

今日、『タクシー運転手』を今一度観た。わたしは出来る限り無心で2回目のスクリーンに向かおうと想っていた。初めてこの映画を観た後、心に残るものがあつたから。それは韓国にあつて日本にはないと感じたが故に。

主演のタクシー運転手を演ずる韓国名うての名優ソン自身は「光州事件」があつた1980年は中学2年生。30数年前の悲劇を題材にした本映画を印象づける冒頭の場面。妻を失くし、幼い娘と二人暮らしの日常の一コマが描写される。大屋の子供との喧嘩で出来た額の傷を父親に薬を塗ってもらふ幼子の眼のひかりにわたしは深い印象を覚えた。家族を成す娘と二人の生活を支える零細なタクシー運転手稼業。或る日、運転手仲間の常食堂でふと耳にした長距離客の儲け話。走る予定の仲間を出し抜いた行き先はソウルから南へ直線距離120キロ余にある韓国南部の光州市を往復すること。客はドイツ人ジャーナリストひとり。稼ぎどころの長距離上客に気持ち弾む。

道路標識に光州の二文字が出た。行き交う車は殆ど無い。程なく軍隊による通行規制、迂回して地道に出る。いやな予感を感じるが、土地の古老に裏道を教えられ進むが又も規制。若い隊長の対応が何か含みがあつて興味深い。自国の政治にも疎く関心もないタクシー運転手マンソプ、体は大きいが軽くて極々普通のおじさん。何とか光州の街中にたどりついた。次々と現れるデモ、騒乱にびっくりするが、本人は俺には関係ないという様子。しかし光州で命がけの若者達、集会中で見ず知らずの女性からおにぎりをもらいびっくりしたこと。息子を案じる必死な母親をタクシーで病院に送り、顔つきがすこしずつ変わっていく。話が進む各シーンにみるマンソプの表情の変化が面白い。

いよいよ戒厳令下の軍の暴行が激しくなり、街頭での軍の銃撃・催涙弾による攻撃は戦場に等しいリアルな映像に息が止まる思いだ。その中をフィルムに記録するドイツ人ジャーナリストのピーター、男子学生と共に走る。ピーターは私服公安に追いつめられる危険を犯しながらマンソプと光州タクシーの仲間に助けられる。そこに描かれるのは戒厳軍との衝突の様が主ではなく、素朴な運転手マンソプが関わってくる人達との中で変容していく様が俳優ソン・ガンホを通して人間性を持って訴えてくるものに感動する。そして軍との衝突で銃撃を負った負傷者を光州タクシーが連なつて救出する場面は事実あつたこと。自然発生的に個人が意志を持って困難に向かう韓国市民の力は今の日本にはあ

り得ない。一見民主的で法治国の日本だがその制度はマヒしている。人々が欲する自由への渴望は薄い。

マンソプの車を修理する間、運転手仲間の家にかくまわれる。男子学生、ピーターと共に一晚を過ごす。家に残した娘が気がかりなマンソプはひとりソウルへ向かう。途中、娘の靴を買い、食堂で麺をかきこむ。空腹さを見た店番からおにぎりを貰う。耳にした光州の噂や新聞を見ても事実とは大違い。いったん車をソウルへ向けるがピーターとの約束を果たさべく再度光州へ反転する。この一連の場面はすばらしい。誰に指示されるわけではなく、マンソプの中から自然に沸き起こってくる心の動きが胸を打つ。監督チャン・フンの構想力とソン・ガンホの人格、演技力に驚嘆する。武骨にみえる緑色のタクシーと一体となって更に印象が深い。



『恋は雨あがりのように』

西松 優

日本映画愛好家

二〇一八年 東宝 1.10分

監督 永井聡

脚本 坂口理子

出演 小松菜奈、大泉洋、清野菜名、磯村勇斗

この映画の真のテーマは深い傷を負った若い白鳥が少しずつ心と体の傷を癒し空へ飛び立っていく姿で、それは映画「森崎書店の日々」と重なる。「森崎書店の日々」では男に裏切られ憔悴してきた主人公の心が古書店街の静かな毎日の中で徐々に回復していく、その微妙な心の変化が丹念に描かれるが、この作品では繊細な心の描写にはあまり立ち入らない。

コミックが原作だけに周辺人物の役割・性格をはっきりさせて周辺的人物と関わりながら、勝気な気性のあきら（小松菜奈）の動きの中に心の変化を写し出す。また、劇中「雨」や「走る姿」があきららの心の様子や場面転換に効果的に使われる。



高校陸上の記録保持者あきらが、ケガで陸上ができないと絶望する中、やさしく声をかけてくれたファミレスのバツイチ中年店長（大泉洋）を好きになりそこでアルバイトを始める。あたかも恋の行方がテーマのように観客に期待をもたせながら進行させる永井監督のテクニクは上手い。

あきららの陸上への「未練」が店長の「やさしさ」を介して「恋」へと転化し逃避していく。「青春」特有の衝動的で自分しか見えないあきらには客観性や現実、周囲のやさしさに気づく余裕はなく、店長に思いのたけをぶつけるしか術はない。

その逃げ込んだ場所からあきらを救い出してくれるきっかけが図書館の一冊の「本」だったのが興味深い。一方、店長も日々の生活に追われ若い頃の志を失っていたが旧友の書いた「本」



を見て自分を冷静に見つめ直すきっかけになる。途中から二人の「志の再生」にストーリーを転換させるが観客は自然に同化できる。あきらも店長も「未練」を「目標」に変え生きがいを見出していったのは、あきらには親友・ライバル・先輩といった「現在の友」、店長には学生時代からの「旧友」が支えてくれたからだ。「現在の友」と「旧友」との対置が映画の深みを増し、観客自身の思い出の中の友を呼び覚ます。

テンポのよい青春映画で、一粒で「恋愛、友情、希望」が味わえる。特に、観客に自分の地点でささやかでも情熱や生きがいを持つて生きることの素晴らしさを教えてくれるのがうれしい。変化する球万能の大泉洋の演技と直球型の小松菜奈の演技が上手くかみ合っている。小松のラストの顔のアップにいじらしさが滲む。モデル出身だけに表情の作り方がうまいので、演技力を更に高めたい女優さんになってほしい。



## 焼肉ドラゴン

林久登 スタッフ

2018年 KADOKAWA、フアントム・フィルム 126分

監督 鄭義信

原作・脚本 鄭義信

出演 真木よう子、井上真央、大泉洋、桜庭ななみ

大江晋平、キム・サンホ、イ・ジョンウン

鄭監督は在日朝鮮人で、今までに多くの脚本を手掛けて高い評価を得ている。また、本作品は既に10年前に鄭自身の演出で舞台化され話題になったものだ。その戯曲をベースに今回映画化することになり、周りに進められて初めて監督をやることになったそう。

しかし、冒頭、パンフォーカスで息子の帰る姿を取るショット（小津のショットを連想させる）や、劇中の狭い空間でじつくり構える長回しのカメラワークを見ていると、とても初めての監督作品には見えない。

今まで日本と朝鮮を扱った作品は多く残っているが、その中でも『月はどっちに出ている』（1993年、崔洋一）『血と骨』（2004年、崔洋一）『かぞくのくに』（2012年、ヤン・ヨンヒ）等は、いずれも在日コリア作家の作品で、彼ら自身の民族の文化

に根ざした生きざまをリアルに描いて衝撃的だった。この作品も鄭でなければ描けないという要求に応え監督を引き受けたと言う。その結果感情の振幅の大きい朝鮮人家族の日常を真正面から撮った骨太の人生ドラマになっている。

伊丹空港近くにあった在日コリアン集落に住む、ある韓国人一家が、離散していくまでの2年間（1969〜1971年）の波乱の日常を描いている。感情をストリートに出して激しくやり合うシーンなどは、辟易するところもあるが、戦後の民族間の歴史に翻弄されながら、夫婦を核にして家族が結束して生きていく逞しさに圧倒される。

韓国の役者は監督自身が直々に出演依頼をしたというだけに素晴らしい。日本の共演役者も頑張っているが、彼らの存在感には勝てない。父役のキム・サンホと母役のイ・ジョンウン、それに大樹役のハン・ドンギユも見逃せない。大樹（ハン）が長女静花（真木よう子）の恋敵哲男（大泉洋）と張り合うシーンは、微妙な間の取り方が素晴らしく、緊張感と同時にコミカルな雰囲気醸し出している。とりわけ、静花の前で演じる2人のマッコウの飲み比べショットは抱腹絶倒だ。

鄭は言語の違いによるコミュニケーションのすれ違いをうまくドラマの中で生かし、笑わせる。この監督は喜劇とは何たるか

を知っている監督だと思う。

しかし何といつても、彼女らの父龍吉、母英順が秀逸。いつも「たとえ昨日がどんなでも、明日はきつといい日になる」と、泰然自若としている家族の大黒柱、父役のキム・サンホ。それに家族への愛情にかけては誰にも負けない肝っ玉おっ母のイ・ジョンウンが素晴らしい。

その2人の一人息子で失語症になった時生（大江晋平）は、いつも屋根に登って一人で過ごすストイックな少年（『美しい夏キリシマ』2004年の屋根の上で過ごす少女に酷似）父の引くりヤカーの荷台に乗り、2人で雄たけびをあげて疾走するショットは『タイタニック』1997年の船上の2人に重なる）爽快感を共有させられる。その溺愛する息子を失って河原に駆け付ける英順の姿は、カメラワークも素晴らしく見ている側も現場に居合わせているような臨場感を味う。

結局家族は国有地の不法占拠ということに立ち退きを強いられ、長女夫婦は北朝鮮へ、次女夫婦は韓国へ帰って行くことになる。この作品がエンドロールを迎えた1971年から、今年、40年近く経つ。私たちは、彼らのその後を容易に想像することが出来る。だから余計切なくなる。

動機不明の犯罪が跋扈する殺伐とした最近の日本。やったことを、やらなかったとか、記録に残っているものを、怪文書と言っ

て切り捨てたりする、傲岸不遜、厚顔無恥な日本のトップたち。そんなまっとうな人間を逆撫でするような輩を見ていると、時代に翻弄されながら、貧しいながらも、ウソをつかず、本音で笑って、泣いて生きたこの家族がなんと光って見えることだろう。泥臭いがそんな世界を圧倒的な映像で見せてくれる。

【私の気に入ったセリフ】

息子を失い、失意の夫（56歳）に投げかける妻（46歳）の言葉「あんた……うちはまだがんばれませ。今夜にでも、息子、つくりましょか……」



## ポルノ

### 『娼年』

豊楽志夫 ブラックシープ

2018年 フォントム・フィルム 119分

監督 三浦大輔

原作 石田衣良

脚本 三浦大輔

出演 松坂桃李、真飛聖（オーナー静香）

とみてあみ  
富手麻妙（咲良、唾）、桜井ユキ（白崎恵、大学生） 大谷

麻衣（ヒロミ）

今回からこの「ポルノコーナー」はオイラが担当する。松坂桃李は好みの男優ではないので、彼の作品はあまり見ていない。一度何かの映画で女装になっているのを見た記憶があるが、それはそれでナカナカのものであった。その男が女相手の男娼になるといので、ポルノ担当者としては見逃すわけにはいかない。名古屋のセンチユリーシネマまで出掛けて行く。ここの一階のホールはスクリーンを見下ろすような急勾配の客席になっていて、非常に見やすく座り心地がいい。いつも感じる単純な疑問だが、スクリーンにどうやって後ろから写すのだろう。

さて、この作品、舞台でも同じ監督の三浦大輔が松坂とタッグを組んで話題になったということだ。だから、シナリオの原形は

あったわけで、よく練られている。

バイトに明け暮れる生活を送り、女にも恋愛にも興味を持っていなかった大学生リュウ（松坂桃李）が、あるきっかけでボーイズクラブに誘われる。いわゆる女性向けのデリヘルの出張所だ。イケメンで物静かな男にいろんな女から声がかかってくる。安いバイトをしているよりは実入りもいい。リュウは次第に男娼の世界にハマっていく。

濡れ場は即物的で前もって絵コンテにも描きにくいと言われているが、舞台で一度シミュレーションをしているからか、過激なからみシーンが、いろんなバリエーションで出てくる。どうやら、舞台で出来なかつた禁手をこの映画の中でやっているようにも見える。普通、これだけ次々と濡れ場シーンがあると、観る側はうんざりしてくるものだ。だから日活のロマンポルノ時代は70分で十分だったが。この作品は120分近い尺だが、それで飽きない。観る側を引っ張り込む力がある。久しぶりにエロい映画を見せてもらった。

フェラ、潮吹き、放尿、何でもありで、しかもあざとくない。肉体と肉体のぶつかり合いはまるで、格闘技の世界のようでもある。特に、リョウと初対面で一目見て、奴とやる気になった中年婦人とのセックスシーンは圧巻。ホテルに入るや否や、くんずほぐれつの取っ組み合いで、長々と舌をからませているうちに、女の手が男のパンツの中に入り〇〇〇をモミモミする。男は女の〇

〇〇に指を入れ激しく動かす。互いにあらゆる手を駆使して快楽をむさぼる。床と壁に囲まれた狭い空間でのカメラの処理がうまい。ベッドにいく余裕などない。それに、行為中に獣じみた叫び声が、ど迫力がありエロい。

松阪は舞台でも同じ役をやってきたというが、『愛のコリダ』（1976年）の藤竜也のように本番をやったわけではない。しかし、よくぞこんなハードな役柄に挑戦したものだ。ポルノといえば女が主役で男は黒子役が今までの概念だが、この作品は男娼だから男が主役だ。だが、彼はマッチョな男じゃないし絵にならないのではないか、と置いていたが、そんな概念をぶっ飛んだ。役者として一皮むけたと言っていいたいだろう。

さて、終わって館内を見渡すと観客は20〜30人ぐらいで、ほとんどが女性。オイラは場違いなところに来ているようで肩身が狭かった。70年代の日活ポルノ映画時代と違って、今や女性の方がH度も上がっているようだ。男は頑張らないといけない、でない、ますます見下され退化することになる。

江波杏子が現役の老女役で、西岡徳馬が変態爺役で出ている。どちらも老残を晒している（失礼）。でも、それでも女は絵になるが、男のだらしなさは、いかんともしがたい。やがて誰もが通る道だが、というか、己はもう差しかかっているか…

